

## 新型コロナウイルスの源流

小松左京の『復活の日』は、新型コロナウイルスのパンデミックで、人類が絶滅の危機に陥るといふ恐ろしい小説です。小説の中では、つい2か月前まで通勤客でごった返していた電車のホームが閑散とし、咳込む人がいれば周りの乗客が神経質に身構えるようになる様子が描かれています。新聞の社会面の左下に控えていた感染の記事が、やがて三段ベタ記事になり、社会面トップから二面の国際面で扱われる様子も。1964年の作品ながら、その描写は「いま」を正確に写しているように見えます。小説では、医療機関に押し寄せる患者たちが秩序正しく利他的にすら振る舞うにもかかわらず、次第に現場が疲弊して崩壊してゆく様も克明に描かれており、ちょうど今イタリアで起きている事態を見るようです。

フィンランドのラジオ講座で、おそらく死に絶えてしまった聴取者に向けて、文明史の教授が次のように訴えるのが印象的です。

いかにも、この災厄は不意うちだった。科学者たちでさえ予測できなかった。あまりに急激すぎて、災厄に対する全人類の統一戦線をはるだけの余裕がなかった。しかし—それにしても、われわれが全力をあげて闘うことは 原理的に不可能だったでありましょうか？ 人類がもっと早く、自己の存在のおかれた立場に目ざめ、常に災厄の規模を正確に評価するだけの知性を、全人類共通のものとして保持し、つねに全人類の共同戦線をはれるような体制を準備していたとしたら—災厄に対する闘いもまた、ちがった形をとったのではないのでしょうか？ (『復活の日』角川文庫)

### ■ 種は異常気象をどう乗り越えてきたのか

現実の世界に戻って、いま、喫緊の課題は、感染拡大のピークを遅らせて医療崩壊が起こらないようにするにはどうすればよいか、ということだと思います。しかしもう一步踏みこんで、なぜ新型コロナウイルスが発生したのかについて、ヘイトや謀略説ではなく考えることも重要だと思います。「自己の存在のおかれた立場に目ざめ、常に災厄の規模を正確に評価する」ために、わたし自身が腑に落ちるように理解した話を、ご参考までに紹介したいと思います。話はやや迂遠な方向をたどりますが、ご容赦ください。

昨年わたしは、広川町太原の銀杏林を訪れる機会がありました。ぶどう農家の方が、亡くなった奥様への思いを込めて農園跡地に約80本の銀杏を植樹したものが立派な樹林になっており、初冬には葉は金色に染まり、敷地一面が黄色い落葉のじゅうたんに覆われます。ふだん見慣れた街路樹の銀杏とは違い、黄金色に輝く樹林は荘厳で、異世界にまぎれこんだような、不思議な気持ちにさせられました。そこで、銀杏という種の由来について調べてみたのですが、興味深い事実にとどり着きました。

銀杏の木は、約2億年前の中生代ジュラ紀に栄えましたが、170万年前の氷河期に恐竜とともに姿を消しました。100万年ほど前には化石の記録も途絶えているのだそうです。このため銀杏は、メタセコイアとともに「生きた化石」と呼ばれています。

今残っている銀杏は、絶滅を免れた1種類が10世紀ごろに中国東部で再発見されて、人間の手で移植させられたものなのだそうです。諸説ありますが、わが国に伝来したのは13世紀鎌倉時代あたりではないかと言われています。

銀杏の遺伝子研究によると、中国の浙江省天目山を中心とする東部、重慶市金佛山を中心とする西南部、広東省南雄を中心とする南部の3か所が、遺伝成分の「避難所」と考えられ、世界が異常気象に見舞われたときに、種がこれらの避難所に収縮されていったのだそうです。そして気象条件が良くなると、再び外の世界に拡張するシステムをとっていたということです。ジュラ紀に栄えたのち、浙江省天目山あたりに「避難」していた銀杏の木は、数億年の時間を経て復活し、全世界にその種を広げることができたというわけです。

新型コロナウイルス発生地の地といわれる武漢を世界地図で見た時に、わたしが感じたのは、まさに3つの避難所のひとつ「西南部」に近接しているということでした。

## ■ 遺伝子のプール

写真家・生物研究家の青山潤三さんは、中国奥地をフィールドに様々な生物を撮影、調査した経験に照らして、新型コロナウイルスが発生したのは、この地域の生物多様性、遺伝子の宝庫とも言われる特殊性に由来するのではないかと推察しています。（『現代ビジネス』「そもそもなぜ武漢は新型コロナの発生地になったのか」2020.3.22）

武漢の位置する、河北省西北部はジャイアントパンダの野生東北限や、トキの現存する唯一の野生地にも近接しており、さらに武漢の西南方一帯は、稲作の起源地とも言われています。まさに生物の多様性をささえる「遺伝子のプール」のような場所です。

青山さんは、今年の1月16日、中国当局が新型コロナウイルスの「人-人感染」を認めた日に湖北省の長江流域の三峡ダム建設によって世界最大の淡水魚類「ハシナガチョウザメ」の絶滅が認定されたのは、象徴的な出来事だと語っています。

新型コロナウイルスの感染は、一次宿主である野生のコウモリが媒介した可能性が相当に高いとしても、そこで究明をとどめるのではなく、新型コロナウイルスがなぜいま出現したのか、それが現代社会とどのようにつながっているかを考えることがなければ、自然から人類へ向けた警告を見逃すことになってしまうと、青山さんは述べています。

多様な生物の「遺伝子のプール」である中国の国土で、ひたすら効率だけを求める近代化が、過去から連綿と引き継がれてきた地球環境と生物との共存を断ち切ってしまう。そのことへの警鐘として、新型ウイルス発生をとらえるべきではないか、という提言です。

銀杏林の荘厳な姿が、自然の不思議な力でようやく命脈を保っていたのだとすると、その遠大さに気が遠くなる思いがします。もしかりに、その摂理を蔑ろにしたことに対する自然からの警告ならば、静かに耳を傾けるときではないかと思えます。（所長 瀬戸 英晴）